

グラッペの悲劇「ドン・ファンとファウスト」

杉山 さんしち

前號でハイネの作つたバレエの腹案「ファウスト」について短い解説を試みたが、ファウスト文學研究の一資料としてハイネに次いで、いわゆる青年ドイツ運動の一惑星とも稱すべき戯曲作家グラッペのファウストについて紹介したい。

我グラッペは一八〇一年十二月ドイツ中部のリッペ國デトモルト市に生れ、父はその刑務所長を勤め、貧困はグラッペの一生をつきまとつた。グラッペは少年時代から明るい性質を持たず、孤獨を好んで人と交らず、冷笑的な傍觀者の如くに人々から思われた。長じてライプチヒとベルリン大學で法律を修めたが、修學時代にも人生に希望と興味を感じずに悶々と生きながら、しかも突如として興奮し、亂暴を働くという内攻的な性質が著しかつた。學業に勵むよりは、むしろゲーテ、シラー、特にシェイクスピアの戯曲を愛讀し、芝居の見物だけは怠らなかつた。そして少年の頃に覺えた飲酒は學生時代になつていつそう烈しくなつた。酒盃は一生彼を離さなかつた、後年郷里で公職に就いた時も常に執務の卓上にのつていた。 Hoffman がベルリンで毎晩酒場に通つた有名な話のように、グラッペも亦ある酒場に通ひ、そこに集まる友人と時勢を論じ、自作の詩や戯曲を朗讀し、又手輕なあやつり人形の舞臺を作つて人形芝居を試みたりしたことが傳えられている。グラッペはしかし酔つばらつては亂暴や無作法を働いたので人々から好かれず、惡評を受けることが多かつた。

彼は自身俳優となることを熱望し、又それが實現せねば劇評家たらんことを願つた。ライプチヒ市にルードウィヒ・テークを訪ねたが、彼の希望は實現せず、淋しく郷里に歸つた。彼はここで宿願を棄て去り、役人となることに決心し、軍法會議官という職に就いた、名前はいかめしいが大した官職ではなかつた。元來病弱な彼は神經衰弱が重くなつた。世間は彼を病的な變人のように言いふらした。

一八三三年彼は結婚した。新婦は彼を幼時から保護後援した恩人のむすめであつたが、この結婚は最初から深刻な夫婦げんかの連續で終る運命を持つていた。妻はグラッペの母と合わなかつた。

心弱いグラッペはひとり家を逃れてデュッセルドルフに住むイーマンを頼つて生活の更新を計つたが、イーマンとの友情も長く續かなかつた。

一八三六年五月彼は失望と病氣とのために疲れきつた身を自分の家のある郷里に運んだが、妻君を恐れて長く自宅へ入らず宿屋で暮した。が同年九月自宅で脊髄結核で永眠した。

彼の言葉にこんな一句がある——「私が死んだら、私には好ましいことだろう。私が生きていなかつたら、その方がもつと好ましいことだろう。」

グラッペの悲劇「ドン・ファンとファウスト」(ドン・ファンは、ドイツ語風な讀み方をすれば、ドン・ユーアンとするか、又はドン・ホアーンとすべきであろうが、ここでは我が國の呼名に従う)は一八二二年(彼の數え年二十二歳)から二三年に起稿されて一八二八年に完成を見た。執筆の刺戟は當然ゲーテの「ファウスト」から受けたことであろうが、その頃活動していた音楽家で歌劇を十曲も作つたスボールの歌劇「ファウスト」(一八一六年プラーク市初演)から直接影響があるかと云われる。更に又バイロンの「マンフレッド」、「ドン・ファン」

の二作品の影響の著しいことは、人々の認めるところである。

ドン・ファンを主人公とした、世間に一番知られた歌劇は云うまでもなくモーツァルトの同名の歌劇である。モーツァルトの此曲は一七八七年の秋にプラーク市で初演された。グラッペの悲劇の中のドン・ファンはこれらに據るものであつて、彼の劇中の人物、ドナ・アナ、ドン・オクダヴィオ、ドン・ファンの従僕などはドン・ファン歌劇と同名と成つてゐる。

ドナ・アナの父が殺されて後、石の死靈となつてドン・ファンの晩餐に招かれて出現し、彼の改悛を勧めるモーツァルトの歌劇の終末は、グラッペの作の終末と全く同一である。

ファウストはドン・ファンと結ばれグラッペによりドイツ文學に出現したが、次に述べる筋の紹介や、批評家のことばで分るように、残念ながらグラッペのこの悲劇はふたりの結びつきの必然性を缺き、戯曲的な頂點を作りえなかつた。特に北方の浪漫的理想を代表し無限の憧憬に燃えて努力するファウストと、官能の喜びを求めて肉の解放と自由とを實行し、制度を破壊し、因習を冷笑するドン・ファンと、このふたりの男性がそれぞれ地獄に落ちて行く——即ちふたりが生命を賭けるだけの價值あるようにその戀人であるドナ・アナの人間が裏打ちされてゐない點が大きい缺點と成つてゐる。アナは夫となるべき男を嫌つてドン・ファンを愛するけれども彼女の苦惱は深くない。ファウストに對しては初めから氣味悪さを感じて相手にしないのである。

グラッペのこの悲劇が作られて後數年して、レーナウはこのふたりの主人公を別々にして「ファウスト」と「ドン・ファン」の二作品を作つた。次號にはレーナウの作品について紹介を試みたい。

グラッペの悲劇「ドン・ファンとファウスト」の筋はだいたい次の如きものである。

主な人物

ドン・グスマン スペイン國セヴィリヤの知事、スペイン公使となつてローマ市に駐在している。

ドナ・アナ 知事ドン・グスマンのむすめ。

ドン・オクタヴィオ 知事のいとこ、ドナ・アナの婿。

ドン・ファン スペイン貴族。

ドクトル・ファウスト

騎士 悪魔の假の姿。黒衣をまとう。

その他ドン・ファンの従僕、ローマの奉行（警視總監）、地精など。

所 ローマの都とモンブラン山（アルプス最高の峯）。

第一幕。

第一景。ローマ都内。スペイン廣場の附近。夜。知事グスマンの邸前である。幕が明くとドン・ファンが登場して、従僕のレポレオとしめし合わせ、知事のむすめドナ・アナの窓下で劍を抜合つて喧嘩をよそおい、その騒ぎによつてアナを外へ呼出してアナと會う機會を作る計畫をめぐらす。ふたりの立廻りを聞付けて知事が、アナの婿、ドン・オクタヴィオを伴つて邸前から出て来るが、ドナ・アナは階上の窓に顔を見せただけで引込み、ドン・ファンの計畫が失敗する。しかしアナの父の知事とアナの婿オクタヴィオと面識を得て、知事に向つて北ドイツの氷の荒野からローマの都へ来た大魔術師を御存知ないかと問う。今夜ここへ忍んで来たのはドクトル・ファウストであるが、魔術よりは鐵と男子の勇氣の方が力まさり、私の劍が彼を追拂つたのだ、と邸前の立廻りと言いくるめる。ファウストがあなたの女の身のまわりに魔術の輪を引いている。呪文を唱えてバルコンへ彼女

を誘い出そうとたくらんだのだ、と説く。ドン・ファンは明晩あげることになっているドナとオクタヴィオとの結婚式に、父から招待を受け、出席を約束して別れる。

そのあと彼の従僕レポレオは、戀仲となつてゐるアナの女中リゼツテからアナの明日外出する時刻を、聞出す。

第二景。同じくローマ。七丘の一つのアヴェンティン山上のファウスト邸内の室。夜。ランプが一つだけとぼる。

ファウストの長い獨白——二百七十行を越す怒濤の如き彼の心中の長い、強い吐露が始まる。仕事をしたい、研究をしたいという命を削るような彼の渴望は満されない。わたしの如く努力した者は他にあるか。わたしの踏まなんだ藝術、學問の小徑がどこにある。汝、聖書、大いなる書よ——異文と二重の意味を含み、知恵とふしぎな教をたたえ、信仰の岩と人人から稱えられているが、汝の一枚一枚は、この暗い嵐の中で悩んでいるわたしを守つて安全な屋根をふいてくれぬ。聖書の紙は秋の木の葉の如くに朽ちて、ひとひらづつ散つて行く。ああ、わたしの頭の中には何という火の文字が燃えることか。——「それを知らざる限り、汝は何物をも信ずる能わず。それを信ぜざる限り、汝は何物をも知る能わず。」と。この謎を知り、この謎を解かんとして歎かなんた者はない。だがその解答を發見した者はない。——假象に眼くらんで假象を光と信ずるほどの弱虫どもは幸福である。彼等は盲目的に希望するから、盲目的に信ずる人々、夢に酔う魂である。愚かなために幸福であるよりも、わたしは苦惱を受けて血まみれになりたいのだ。

次にファウストは祖國ドイツをのがれ世界の古都ローマに來た理由を述べる。

「ドイツよ、祖國よ——しかしわたしは祖國のために戦死が出來なんだ身だ——、ドイツ、汝はヨーロッパ

の心臓である——しかしかつてためしなきほどに、きれぎれに引き裂かれた心臓なのである。

ローマよ。汝は最も廣汎な過去の破れた鏡である。國民と土着の市民たちの血の光に輝きながら、この鏡の破れの中から次々に英雄の姿が浮び上つて来る。一瞬の間に數千年の時間が溶けこんでいる都である。汝の劍が一切を獲得した時、汝も亦一切のものと共にふたたび夜と野蠻ベルサイの中に落ちたのだ。だがこのバルバライの中から、新しい血が、新しい光が湧き上る、——と彼は信じ、希望してこの都へやつて來たのである、「全人類を我身に受取るために」——「廢墟と過去の目的は、教訓を與えるためのお話にあるのではない。ドン・ファンの如き者だけが破壊の溶岩の下で數百萬の花を見て樂しむ力を持つてゐる。しかしドン・ファンは一切の花がはかなく、うつろい易いものであることを考えることが出來ぬ——彼には氣晴らしは見つかろうが、唯一の者、不朽の者の榮えないところに、安心と平和とを見つけ出すことは出來ぬ。」ファウストは神を求めつづけて今や地獄の門前に立つこととなつた、と叫ぶ。たとえ炎の中をくぐらねばならぬとも、彼にはもつと歩いてゆく力がある。突進する力がある。目的を彼は遂げねばならぬ。天國に達する小徑があるものならば、その道は、少くとも彼にとつては地獄を通らざるを得ない道なのである。

ファウストはそこで惡魔を呼び出す呪文の本をひらく。卓上の燭が消える。

「眞晝の日が常に暗くなるかの穴から、別の永久の光を、我が僕しもべたらしめんために呼び出そう。——のぼり來よ、來て、我を照らしてくれ。」

燭の消えたところに赤熱の火炎が燃え上る。これが地獄の閃光なのである。彼は本を棄てて立上り、虚空を見守る。地獄の門が見えるように思われる。彼はこの世に告別し、この世の夢を投げ棄てたい。「わたしは目を覺ましたいのだ。わたしの目が醒めてゐることを知りたいのだ。」——やがて十二時の鐘が鳴る。扉を三度ノック

する音が聞こえる。三度とも強い雷鳴を伴つて、ファウストが失神して椅子に伏す間に騎士が出現する。

騎士は中年のねんばいで、顔色あおさめ、第十六世紀風の扮装だが、黒い服を着ている。地獄の使者、悪魔が騎士の姿をしているのである。

騎士とファウストとの對話となり、ファウストは騎士に向い、「汝の強い翼をもつて知識の境界を超えて、信仰の國へわたしを運ぶよう努めてくれ。」「宇宙と人間と、彼等の存在と彼等の目的の謎を解くために力を借してくれ。」「わたしが安心と幸福とを見出すことの出来る道を、たとえ炎の光に照らされても、わたしに教えるように努めてくれ。」と要求する。ファウストは手を傷けて滴る血汐で契約書に署名を終る。

騎士は幸福とは、虫けらが己の力以上に匍つていこうなどともがかない謙虚さである。幸福とはドン・ファンの如く常住に享樂して、しかも胃袋をこわさぬことである、不幸とは現世の健康な料理を消化するためにファウストの頭が弱すぎることに存するのだ、それゆえ架空の幻影にあこがれ、それを求めることだ。ファウストが信じたい、愛したいと云うなら、ローマ第一の美女ドナ・アナを戀して、うつつを抜かすがよい。戀にうつつを抜かす者は、溜息をし、望みを抱き、信じ、歡喜するからである、などと述べ立てて、ファウストをそそのかす。

第二幕。第一景。

ローマ。知事ドン・グスマンの庭園。午後、夕方近い。

ドンファンが従僕とふたりでアナ・ドナが邸から出て来るのを待伏している。やがて彼女は白い服を着て登場するが、結婚式を目前に控えて悩んでいるのは、ドン・ファンを愛して、婿のオクタヴィオを愛していないからである。彼女の父の知事は名譽を重んじ、禮儀を墨守する頑固な人間であるが、この父親に育てられ、しつけられたむすめアナも亦、父と家との名を汚さんことを恐れ、未來の夫への義理にそむくまじ、貞節を破るまじ、と

の知性と、ドン・ファンへのほんとうの愛情、自己の幸福を求める感情との争いに苦しむ如くに見える。しかしアナは單純である、「ドン・ファンが、たとえ地獄の神であろうとも、オクタヴィオさま、あなたには操を破りませぬ。わたしはあなたにお約束をいたしました。わたしはあなたを愛したいのです、あなたを愛さねばならぬのです。」と決意している。

ドン・ファンは隠れて彼女の歎きを聞いて言う、戀する者には徳は何するものぞ、勇を鼓して攻撃を行うときは、徳はもう地べたへ投げ飛ばすもの、——女の身には、徳はわれらの勝利の味を甘くするコケトリイの一つに過ぎまい。無邪氣の最善は、徳などをなくすることさ。

アナは始めてドン・ファンに氣づき、彼を恐れて彼の退去を求めるが、彼は平氣で彼女の美しさと戀の甘さとをたたえと共に、彼女の婿オクタヴィオを殺して自分の戀をきつと成就させて見せると言う。アナは彼を憎むが、彼を愛する心は變らぬ。彼に對して愛を告白するが、しかしオクタヴィオの妻に成る決心はゆるがない。

「戀をわたしは阻止できませぬ、とはいえ、わたしは名を救います。」「夫に誠をつくすのは永遠のこと、愛はうつろい易いもの。勝利は永遠に授けられますように。」

オクタヴィオが出て來てアナと語る。彼は結婚の喜びに酔うて、アナへの愛を語り、自分の幸福をたたえる。

ふたりが退場したのち、すぐドン・ファンも立去り、そのあとへ騎士とファウストが登場する。このふたりの對話——ファウストはふたたび宇宙の謎を究明したいという抑えがたい自分の熱望を騎士に打明ける。騎士は答えて、言葉の示す以上のものを究明しようという熱望を感じるのは、ファウストがわざと熱望を刺戟するからだ、「あなたの百萬人の同胞のふだんしているようにするがよからう、——眠つて、食つて、飲んで樂しむがよい。」と説く。ファウストは承服出來ぬ。惡魔を僕として自由に驅使しても、満足は得られない。自然の、最も深い脈

搏はどこで打つているのか、その脈搏を示してくれ。それが不可能ならば悪魔も人間以上には知慧がないようだ、と迫る。

騎士は答える——幸福を享けむと努力する意志を抱いているなら、先づ自ら生長して巨人の精と成るがよい。この精こそは、千年の火焰に包まれても、あらゆる疑を抱いても、——天國の上から落下するそのもなかにも、なおいささかも挫けることなく、己の力をたのみ、勝利を期待しながら、永遠に憎み、戦うのです。

ファウストはそれに答える——疑を解くことなく、疑に屈服し、愛の眞髓を究めることなく、憎惡で満足しているような精は——それは熊のほまれとこそは成るが、人間のほまれとなることのない精だ。わたしはおまえを誤算した。

騎士は、あなたが人間でいらつしやることが残念ですな。あなたの本質の中にはひとりの眞正な神が住む。あなたの渴望を鎮めるにはわたしの力が弱すぎるのがくやしい、と答え、ファウストの前に鏡を差出し、鏡をのぞいて見よ、とすすめる。鏡の中にはドナ・アナの美しい姿が映っている。

ファウストはすでに「女には接吻もし、希望も、憧憬も注いだが、世界は小さく、憧憬は大きい。神の本體が明らかにならなかつた時に、女をどうして愛しえたらうか」と述べた直後であつたが、鏡を眺めると、たちまちアナの美しさに引き付けられる。しかしこれは悪魔のはかりごとであることは、彼も知つている。——「しかし、まやかしは眞實よりも價值がある。我々はなんにも知らぬことを知るよりは價值がある。」女の姿にこのように夢中になるのは愚かなわざじや——その原因がわからぬわ。理性はこのように教えるけれども、感情に負けて戀を知りそめる。彼は哲學も數學も天文學も、愛する祖國も忘却して、騎士に向い、ドナ・アナの許へ案内し、この老人のしわづらを若返らしてくれと命ずる。騎士から今夜がアナの結婚式があげられる晩であること、しかし

オクタヴィオはドン・ファンに殺されて、アナはドン・ファンの手に歸するだろうと告げられると、アナをドン・ファンの手に渡さず、このわたしが無罪に取つてみせると述べて、ふたりが退場する。

第二景。

ローマ。知事邸の大廣間。なおほかに婚禮の晩らしく照明された廣間が多數見え、それらの中には客が集まり、ダンスが行われている。奏樂。

ドン・ファンが従僕と共に登場し、つづいてすぐ知事、ドナ・アナ、その花婿オクタヴィオが出て来る。知事は娘の幸福を思つて父親らしく涙ぐみ、娘は己の苦惱を歎いて心沈む。彼女はドン・ファンの姿を見、悲しみを抑えるためにオクタヴィオと踊る。ドン・ファンも亦ダンスの群にまぎれこむ。

騎士とファウストが登場。ファウストはある伯爵と自稱し、はなやかな服装で、顔は若返つている。ドナ・アナに紹介される。しかしこのふたりのまわりにはただならぬ異様な氣分が漂う。室内に恐怖のけはいが濃くなり、不吉な感情が人人を襲う。それはファウストの出席のためであることは人々も感づく。ふたりは地獄、死を思わせる表情を具えているのだ。

ファウストはドナ・アナをドン・ファンの手からさらつて行つて彼女を住まわしむべき宮殿をアルプスの最高峯モンブランの上に建造せよ、と騎士に命ずる。騎士は御希望どおりに宮殿はもう出来ました、と答えるところへ、ドン・ファン、ドナ・アナ、ドン・オクタヴィオが、客と共に廣間へ入つて来る。ドン・ファンはかねて計つて命じていた通り従僕をしてオクタヴィオの足を踏みつけさせ、それを口實にして従僕の代りに自ら喧嘩を買つて出て、忽ちオクタヴィオを相手に劍を抜いて戦うが、オクタヴィオは刺されて床に倒れ、はかなく死んでゆく。花婿の死を知らぬ知事は別室で客と祝盃をあげて、歡呼の聲を高らかにひびかせている。

さてドン・ファンはアナに向い、これで花嫁はわたしのものと勝ちほこつた時、ファウストは彼の背後に近づき、彼の肩をたたいて、アナはわたしのものだ、と宣言する。アナは、おふたりのどちらのものにも、わたしは成れぬ、オクタヴィオのむくろを指して「この方があたしの夫おとこなのです。いつまでも。」とひややかに斷言する。騎士はドン・ファンに、ドナ・アナはモンブラン峯の上に引かれゆくことをこつそり告げ、ファウストと共にアナを引いて去る。

それから知事その他の客が變事を知つて駆けつける。ドン・ファンは彼の殺人のはかりごとを見破つていきまゝ客を巧みに抑え、知事ひとりを相手の決闘に應ずる。彼はファウストから必ずアナを奪い、彼女を愛することゝをひそかに誓いながら、アナの父の命を斷つ劍を抜くつもりなのである。

第三幕。第一景。

ローマ。北方の都門のひとつの外の廣場。夜ではあるが、まつくらではない。

知事、ドン・ファンが各々從僕ひとりを伴つて登場する。ふたりはすぐ鞘を拂つて劍を合わせる。三度合せて知事が刺される。瀕死の知事はドン・ファンに向い、むすめをファウストの手許から救い出して、修道院へ入れてくれ、と頼むが、ドン・ファンはアナは美しい、アナをいたすらに衰えさせることは許せぬ、あくまでアナをわがものにする、と答える。

知事——快樂よりもつと意味の深いまじめがある。徳は不朽、死は歡樂にも、生命にもまさるもの。けがれを知らぬ少女を奪う野望を抱いて、父の死を嘲笑しないでくれ。

ドン・ファン——あなたの御教訓には感謝します。だがドナ・アナをわたしはきつと探し出します。あなたがパラダイスに行つて神の姿をごらんなさるよりもつと幸福にあふれて、わたしはアナの腕に抱かれましょう。

そう言葉で彼は去る。

知事は神の恩寵を近く受ける身の喜びを知るが、ドン・ファンに對する復讐の執念は棄て切れぬ。祖國スペインとアナの名を呼び、私のむかし聞いたこと、私のむかし説いたことは、むなしいことばに過ぎなかつたか？と疑いながら死んでいく。彼の従僕と牧師とが知事の死骸を運び去る。

第二景。

モンブラン山の頂上。ファウストの魔法の城の中の華美な一室。アルプスと下界の眺望。

騎士の魔法で築きあげられた豪壯華麗な城が、ドン・アナに對するファウストの限らない愛にふさわしくなく貧弱であるから、もつと美しくりつばに飾り立てよ、と騎士を前にして、ファウストがなじっているうちに、音楽がきこえ、日光が輝き、ドン・アナが現れる。ファウストは始めて自分の名を告げ、素性を明かして熱心に彼女の愛を求めるが、アナは彼になびかぬ、冷靜に「ファウストであれ、神であれ、愛を強請できるとお思ひになるのかしら。」と答える。

ファウストは益々激して、「あなたの目の中の中にのみ、私の生命が生きているのです。愛は唯一の創造力です。」と説き、アナの愛を得、アナを己のものにすることが出来れば、世界のすべてを彼女に捧げるのみならず、彼の涙もまた注ぎましよう、と訴える。ドン・アナ——「あなたの奥さんのことを考えてください。あなたの涙がわたしの心を動かす力がありましようか。」

ファウストは世界を自由に統御する通力を持つていることを示すため、アルプス山脉からロースの谷、プロヴァンスの平野、ピレネー山脉のかなたのスペインまでを次々にアナの眼前に現わし、彼女の故郷セヴィリヤの都をも見せる。そしてこの力をもつて彼は神に反抗してみせる、惡魔に反抗してみせる、己自身にも反抗すると言

う。更に彼は祖國ドイツに轉じてエルベ河畔を歩くマルティーン・ルッターの姿を出現させ、最後に郷里に残した妻の部屋をもアナに眺めさせる。彼の手が動いて招くようにすると妻はそのまま死んで行く。妻も國王も人民もアナのためには彼は殺すことができるのだ。アナは又ファウストの口から、父がドン・ファンのために決闘を挑まれ、悲惨な最期を遂げたことを聞かされ、驚きと悲しみのあまり椅子の上に倒れる。

第三景。モンブラン山中の荒原。

ドン・ファンは従僕を伴つて、アナのおしこめられている魔法の城をめざして登山する中途なのである。彼は結婚を嘲笑して、結婚とは、最も自由な、神々しい感覺を、世界から家庭の部屋へおびきこむふらちな人爲的な試み、慣習となりえず又なるを許されぬ熱情をいやしめて、平凡・卑俗に化すことだ、などと言う。

そこへファウストが姿を現わし、登るふたりを制して歸るよう勧めるが、ドン・ファンは頑固にそれを拒む。ファウストよ、君がいつまでも人間たらんとするならば、何故に超人たらんことを望むのか。惡魔であれ、天使であれ、超人には、女性の愛は、人間以下の生物と同様に縁なきものである。ドン・ファンは人間なのだ。彼が人間として女性を愛し、アナの愛を確信しているのを知つたファウストは、恐れと怒りのためにアナの心臓を引裂くと脅かす。ドン・ファンと従僕はファウストの合圖によつて嵐の中をさらわれて行く。

ただひとり残つた山中のファウストの獨白——愛したことのある者だけが、憎しみを知り、怒りを知っている。いたつて信心深くあつた者だけが、惡魔になることが出来る。惡魔だつた者だけが、眞の信者となる。わたしの愛を退ける女、ドナ・アナ。彼女をわたしは果してより強く愛しているのか、より強く憎んでいるのだろうか？——ファウストの疑と苦悶は盡きない。

第四幕。

第一景。ローマ市外の墓地。知事の大理石の立像が立つている。日暮れはじめる。

ドン・ファンと従僕とは前幕で、知事の墓場へ投げとばされ、ここで死霊を見て慄え上るようにファウストから宣言され、ファウストの通力によつて空中を飛行してここへ到来したのである。墓地に立つている知事の記念像の臺座には「知事ドン・グスマンここに眠り、復讐は彼の殺害者を待つている。」と刻んである。月のぼる。ふたりの對話のうちにこの立像が動き出し、顔を動かす。従僕レポレオは主人の命令に従い、こゝで石像に話しかけて、今夜主人の催す晩餐會に出席するよう招待する。石像はうなづいて承諾の返辭をする。ドン・ファンもそれをいぶかしみ自分でも大理石像に話しかけて、改めて晩餐に招待の辭を繰返す。立像がうなづいて、「承知した。」と云う時、雷鳴と閃電が起る。ふたりは立ち去りぎわに、従僕は小石を拾つて像に投げつけて後、驅け去る。

第二景。モンブラン山地下の洞穴。

ファウスト登場して槌をもつて岩を打っている。ファウストの呼出す聲に應じてグノームと名づけられている地精（年寄の顔をした小人で、人間の苦惱を見て喜ぶ）が數人出て来る。ファウストは暗い洞穴の中でしばらく氣晴しをするつもりらしい。

地精と彼との間に心臓についての對話があり、地精たちは彼を地下に引留めようとして、地下のきゆうくつな狭い世界の樂しさを謳歌する。ファウストはそれには耳を傾けずに、妻が死ぬ時に流した涙や、王位を奪つた人々が王座からてんぶくする時に彼等の流した涙を、地精たちの胸の中に住む永遠の復讐——熱い焰と混合して飲ませてくれと命ずる。この飲物は苦痛をたたえ飲料であるが、他の苦痛を鎮める效がある。ファウストは彼等が沸かして作つたこの涙を飲み、杯を投棄して「私の恐れている巨人は私自身の中に住んでいる」ことを悟ると共

に、いつそう強く自分の心がアナに引かれていることを知る。

第三景。モンブラン山。ファウストの魔法の城の一室。

巨人は我身の中にのみ住むことを知つたファウストは、その言葉も雄大となり、登場すると共に、わたしの望むところのものは、かならずわが物にしてくれん、しからずんばそれを粉碎せん、と叫ぶ。つづいてドン・アナの美しさを讃美し、彼女への思慕の斷ちがたい胸中の苦惱を吐露し、重ねて彼女の愛を求める決意を固くする。

ドン・アナ登場。彼女はドン・ファンを愛していることをふたたび斷言する。そう言われても彼女を斷念することの出来ないファウストは死をもつて彼女を脅迫する。彼は神の前にも頭をさげ、媚びることは出来ない。アナに屈し、追従することはいつそう不可能である。「やさしさ、親切は殻かに過ぎず。眞實が核である」から。アナもいさぎよく死を覺悟して「貞節の黄金の花よ、わたしの頭こゝろを巻かいてくれ。汝の犠牲としてわたしを死なせてくれ。」ときつぱり言う。ファウストは遂に彼女の死を宣告する。彼女はファウストをにくむと言ひ放ちながら死ぬ。

愛といえども愛する對象がなくては、無なのである。人間はみじめである。宗教であれ、愛であれ、偉大なものは直接に人間には達しない。人間にはふかしき梯子が必要である。アナの冷い死顔を見つめながら、ファウストはそう悟り、アナをはじめて見た時に魂を地獄に賣つていなかつたら幸福だつたらうと歎く——「アナよ、目を醒ましてくれ！」と叫ぶが、彼には死者をよみがえらす力はない。騎士を呼び出して彼女を蘇生さすことを命ずるが、騎士にもその力はない。ファウストは後悔の涙に暮れ、アナのむくろに向つて己の罪を詫び、ドン・ファンにアナの死を告げてのち、自ら惡魔に身を渡すことを誓う。

第四景。

ローマ。ドン・ファンの館の華やかな廣間。月の光と星の光が窓から射しこんでいる。

騎士が登場し、すでにファウストは我手に歸したが、今度はドン・ファンを地獄に落とすことが出来るのを喜ぶ獨白の中途に月と星の光が薄れ、大空の雲行があわただしくなり、騎士は黒服を脱ぎ假面を外すと、赤い衣裳に變り、憤怒に燃え立つ顔をして舞臺後方に退いて歩きまわすが、登場するドン・ファンと從僕とは彼の姿は見えない。從僕は廣間の中のただならぬ氣配を感じ、雷雨が起りそうなのを恐れるが、ドン・ファンは少しも氣にかけぬ。ローマ奉行が部下をひきいて殺人の罪によりドン・ファンを捕えて拘引しようとして訪ねて来るが、彼等は外へ投げ出され、部下と共に追い拂われる。

ファウストは顔色蒼白、恐ろしいな形相をして入つてくる。背後にいた騎士が彼におどろかかるとを制し、ドン・ファンとひとこと話す間だけ待つてくれと頼む。彼は重ねてドン・ファンにドナ・アナを愛したかと尋ね、アナはもう死んだ、私と共に絶望せよ、と告げる。

ドン・ファン——絶望せよと云わるるか。苦痛と悲嘆とが、不幸と心臓の血との大波が我等が上に押寄せる時生命のマストにはためく旗を上げることこそ、大切なのである。破滅の淵に臨む時まで、アナの名のために、アナのほまれのために戦うことこそ肝心である。——アナの死は彼の心を動かした。——しかし私は帆をふたたび張り、新しい風と共に走ろう。美しい娘は千人もほかにいるではないか。娘ひとりを見失つて私は悲しむだろうか。——

彼は更にアナを殺したのはファウストであろう、汝は己自身の天國を破壊したのだと責め、彼に決闘を迫る。ファウストはその言葉に胸刺される思がし、アナへの切々たる思慕の情を繰り返すが、永久にわたしはアナを忘れまい。かく思うことがすでに地獄の實在を破滅さすだろう、と叫ぶ。騎士、彼を捕えてその首を絞める。

ファウストの斷末魔の絶叫——私が永遠のものならば、私もまた永遠から永遠に汝と（騎士を指す）争わん。一度あつたようにふたたび汝を足下に踏まえて、私が勝つ日を迎えるであらう。

彼を殺した騎士は後へ引込むが、ドン・ファンを見守りながら幕のおりるまで居残っている。

ファウストが騎士の手によつて殺害されたことは、ドン・ファンらには騎士の姿が見えないので、ドン・ファンはファウストが自ら悶死したものと思う。

彼のむくろを片づけてから、食卓の支度が出来、料理とぶどう酒が運ばれる。ドン・ファンは盛んに食べ、ぶどう酒を飲むうちに、電光、雷鳴が次第にはけしくなる。知事の立像が近づくのを知り、ドン・ファンは劍を抜いてこれを迎える。立像は彼に招かれたので訪ねたのである。彼は立像に斬りつけるが、劍はかえつて折れる。匕首を抜いてふりかざす。雷鳴、紫電。宴のために呼び寄せた樂人たちの音樂。

知事の立像は口を開いて、天國にいるドン・オクタヴィオと、ドナ・アナは幸福に暮し、私をここへ送つてドン・ファンの悔悟と改悛とを勧めるのだと云う。ドン・ファンは悔いるような事を私はひとつ行わない。私の行爲は一切私の満足するところだと答える。石像は重ねて改悛をうながす。ドン・ファンは拒絶する。我身に起る一切の事に反抗、叛逆せずば、人生は無意味だ、と應じ、匕首をもつて立像に立向うが、よろめき退く。

立像は惡魔がファウストの次に彼を殺すために待伏していることを告げ、悔悟すれば私が彼を救うことが出来るのだ、と説く。ドン・ファンは昂然として、私はドン・ファン以外の者には成れぬ。天上の樂園の光に遍照された聖者たらんよりは、地獄の硫黄にまみれた眞のドン・ファンの方が好ましいと言放つ。立像は二度とはもう會うまい、と云い棄てて舞臺の下へ沈む。

騎士は赤の外套を高く投げて、ドン・ファンの館が焼けると、呪う。火燃上り、火の雨の降注ぐ中をドン・

ファンを拉し舞臺の下へ没する。騎士の最後の言——汝らふたりは同一の目標に向つて努力しているが、ちがつたふたつの車に乗つて進んでいるのだ。

ドン・ファンの最後のせりふ——此世に言残す最後の言葉として私は今でも叫ぶ——『國王とほまれ、祖國と愛と。』——火焰と雷鳴と紫電のうちに幕おる。

マクス・ヘッセ版のグロッパ全集の編者、オットオ・ニーテンの本曲についての解説を紹介しておくことにする。

ファウストは無限の憧憬を抑えることが出来ず、ドン・ファンの哲學は浪漫的無目的を唱道するものである。又彼は「秩序」を憎む。ファウストにはカントによつて動搖を受けた深刻な懷疑とフィヒテの個人の神化の説に酔つた時代の趣が著しい。彼が悪魔とためらわずに契約を結ぶのは、最後まで自分の自主性を惡魔に對して持ちつづけることを示すのである。彼が「幸福な人になる」代りに、いかにすれば「幸福な人になり得たろうか」という、悟りだけで満足しようとするのは、純粹な、冷厳な知識欲の極致と云うべきであろう。又この悟りでもつて最後の數景でファウストがその胸を破られる悲劇的な葛藤^{コンフリクト}が暗示されている。

後になつてファウストの胸中に神々しいものが急に目醒めて來る變化は、ファウストの宿願が單にものを知りたいという欲望だけに限られることなく、それ以上に深大なるもの、宇宙を抱括して捕えたいという無限の、浪漫的な憧憬によつて準備されている。又ファウストが天の階調に耳を傾けて聞くことにより、又彼の胸中に到底抑えがたい憧憬が燃え上る限り、今やファウストは愛に近づいて愛を知ることになることがよく分つてくる。

ファウストがドナ・アナをモンブラン絶頂の宮殿にとじこめ、ここで彼女をくどく場は、作者の獨特な偉大さを示すものである。手のとく近さに彼を呼ぶ幸福を空しく失いながら、救われざる人間の苦痛がここには狂わんばかりに述べられている。冷静な學問のある、力のある人間の運命がここに明らかにされる。彼は最後に愛情を求め、すなわち人間たることを求めて救を得んとする。作者の解決がここにある。さてファウストは、知るといふ自己の目的に到達し、又騎士は彼を地獄の獲物として我手におさめる目的を達成したが、この對照的事件を惹起すべき緊密な必然性は認められぬ。むしろ奇怪な氣分の戯れがあつけない結末を結ぶと云うべきである。

この後ドン・ファンとファウストは再び會うけれど、このふたりの行動は平行的に進行してゆく。ファウストは悲壯な印象を讀者に與え、ドン・ファンの場合は諷刺的な要素が盛んに發揮される。彼は知事を、——お化のような印象を與える人物——殺し、信心深い知事と貞淑なアナを嘲弄する。知事の石像が復讐のために近づいても、ドン・ファンは氣にもかけぬ。彼は最後までどんな事にも敬意を拂いえない恐ろしい人物である。又ファウストに對應する諸人物が弱々しかつたり、偽善的だつたり、あるいは滑稽だつたり、という風に描かれている。この點からすれば古いドン・ファン傳説の價値の變更をグラッベが行つたことになる。しかしながら、ファウストに對するドン・ファンがまじめに觀客から受容られないとすれば、戯曲の緊張がいつたどこにあるか。

グラッベのこの作品は機智に富む輝かしい戯曲である。また作者の思想が豊かに表明されているが、主題には血と肉が缺けていて、葛藤が、深い興味を咬むだけの力がない。人物は比喻メタファーのように生命なく、ぶきみに舞臺を走り去るのだ。最後に曲中ただひとりの女性ドナ・アナも、血の通わぬ幻のような性質を除いて、作者が慎重に彼女の性格を暗示しようと努めてはいるが、戯曲の統一的な中心を作るだけの力を持つていない。何故ならばドン・ファンとファウスト二人のりつばな良い性質を一身に具えているような、ひとりの男があつたとしても、こ

八三

れる。

フランツ・メーリングも次のように評した——「ドン・ファンとファウスト」をグラッペの作品の中で最も完成した戯曲であると見る人人の判断に我我は賛成することが出来ない。これはむしろ舞臺で上演することの最も可能な彼の戯曲にすぎない。ふたつの傳説界の混和には無理な、不自然なところがあつて、始終それがついてまわる。ファウストがドン・ファンの戀敵となつてドナ・アナの愛情を受けずに拒まれるとしたら、ファウストから何が残るか。影との戯れだけに過ぎない。意味深長な文句のびらを口の中から垂らしている木偶に過ぎない。曲の中のドン・ファンのシーンだけが熱い生命の息を呼吸している、勿論そのシーンさえ、時を同じくして作られたバイロンの「ドン・ファン」によつて光を奪われているけれども。ゲーテの悲劇「ファウスト」のような、あるいはこの英國詩人の天才的な諧謔的な叙事詩のような、世界的な作品の域に、我々のドイツ詩人は到底到達することが出来なかつた。